

# グループ活動を取り入れた 初級スペイン語教育の試み

Una prueba en una clase elemental de español, usando actividades en grupo

寸田知恵  
Chie Sunden

En general, los alumnos que estudian español como segunda lengua extranjera en la clase elemental, principalmente aprenden la gramática. Sin embargo, por medio de la encuesta se sabe que también quieren hablar en español y conocer países hispánicos. Según la encuesta, algunos quieren viajar a España y los países latinoamericanos, y otros quieren ver partidos de fútbol en esos países. Para darles la oportunidad de práctica de hablar en español y acercarlos a España y los países latinoamericanos, pienso que servirían las actividades en grupo o por parejas.

En este ensayo voy a explicar cómo doy las clases, cómo funcionan estas actividades en la clase y expondré el fruto y dificultades de estas actividades.

キーワード：グループ活動、初級スペイン語文法

## はじめに

日本の大学における外国語学習に対して何が求められているかを学生へのアンケートから探り、その結果を授業に生かすために取り入れたグループ活動の試みを報告する。

### 1. アンケートによる外国語学習の動機の調査

まず大学における初修外国語の学習に何が求められているのか探るため、今回、関西大学で第二外国語としてスペイン語を学ぶ文系学部所属の第一学年生34名を対象にアンケートを実施し、なぜこの言語を選択したのかを質問した。その結果、以下のような回答を得た。質問は自由記述で答えてもらっており、できるかぎり回答者が用いた表現のままを載せている。

Q. スペイン語を選択した理由は？

スペインとか南米とかの国に興味があったから
海外サッカーが好きで、スペインに興味を持ったため
学びやすそうで、使用人口も多かったから
関大で学べる第二外国語の中でドイツ語とスペイン語が気になっていて、ドイツ語は英語に似ているとかスペイン語は発音が簡単とか聞いて、中・高と英語に苦しめられた私は迷わずスペイン語を選んだ
ローマ字読みで複雑な読み方ではなかったから
世界で2番目に使われている言語だと聞いたから
カッコいいと思ったから
スペイン語圏の国に興味があったから スペインに行ってみたくから
インターネットの世界でスペイン語をよく見かけるため、読めるようになりたかった
英語に似ていると聞いたので
多くの民族で使ってるって聞いたから
スペイン語が一番英語に近いと聞いたから
簡単だと聞いたから
スペイン語を母国語とする国が多いため、将来に役立つ可能性があると思ったから サッカーに興味があるから
一番簡単と聞いたから
友達に話せる人がいたから
服が好きで、日本にある有名なブランドはスペインからのものが多いから
姉に簡単だということで勧められた 世界史でスペインの建国の歴史を学んでスペインが好きだったから
スペイン語を使っている国々がこれから一番成長すると思ったから。比較的簡単にポルトガル語にも対応できるから。
いろいろ調べてみて一番興味を持てたから
簡単って聞いたから
テレビ番組で世界一周したアナウンサーが英語の次にスペイン語が喋れたらよかった と言っていたから サッカーが好きだから
ガウディ建築を見るためにスペインに行きたいから
授業のある外国語の中で一番旅行してみたい場所だったから
旅先のタイで同じユースに泊まっていた人に英語とスペイン語ができれば世界を周れる といわれたから
国が多い 何となくカッコいい気がした あんまり難しくないらしい ヨーロッパの言語がよかった
ヨーロッパが好きで、その方面の語学が勉強したいと思って一番わかりやすそうな スペイン語を選んだ

グループ活動を取り入れた初級スペイン語教育の試み（寸田）

自分でもできそうと思ったから
英語の次に多くの国が話しているから ヨーロッパの国に興味があったから
かっこいいから
サグラダ・ファミリアやフラメンコなどに興味があったから
世界第4位の公用語だったから 中国語は2位だけど、アジアの言語はいやだった
高校生の時に1年間だけ学校の授業でスペイン語を習っていたので、せっかく始めたから続けて学びたいと思ったから
中国、フランス、ドイツ、ロシア語よりもスペイン語に一番興味がひかれたので
スペイン語を話す人、国が多い サッカーが好き

多様な動機が挙がっているが、複数の学生が挙げた理由を次のようにまとめられる。

1. 世界にはスペイン語を使用している国・地域が多い。(10名)
2. スペイン語圏の国々の文化・スポーツ・歴史などに興味があるから。(10名)
3. 勉強するのに難しくないと感じたから。(8名)

このクラスの結果で見ると学習の動機は多岐にわたっており、スペイン語を選択した目的が必ずしもコミュニケーション能力の向上ではないことがわかる。

同時に、リーディング、リスニング、ライティング、オーラルの4技能のうち学習をとおしてどれを向上させたいかという質問（複数回答可）を行なったが、コミュニケーション能力向上につながるようなオーラルの能力を伸ばしたいという答えを24名という過半数から得た。次いで習得の希望者が多いのはリーディングの能力（18名）であった。

その一方で、スペイン語圏の国の文化や歴史に興味を抱く者の数は10名であり、その関心はスペインだけではなく中米、南米と幅広い地域に向けられている。

以上のことから大学におけるスペイン語学習に対して、学習者は一般に述べられているように会話能力の習得を強く期待する一方で、スペイン語が話されている地域や文化に関わる事柄も学習したいということがわかった。

## 2. なぜグループ活動なのか

上述のアンケート結果が示す、学習者のオーラルの能力を伸ばしたいという欲求を少しでも満たすため、学習者にスペイン語の発話場面を提供できる、グループ活動を授業に取り入れようと考えた。スペイン語の使用には文章を書くことや文章から情報を引き出すことも含まれる

が、会話を行なうこともその一つとして挙げられる。当然のことながら会話は一人では成立しない。会話には2人以上の人間が必要で、ペアもしくはグループでの活動が前提となる。また「会話」を用いて実際にスペイン語で意思疎通させることで学習者に達成感を与えられると考えたのもグループ活動を導入した理由である。達成感を得ることは学習に好ましい効果があるとされる内発的動機につながる<sup>1)</sup>。

実際、グループ活動については外国語教育に限らず様々な分野において先行研究がなされており、たとえば英語教育についてのものだが(高橋、2008)では、グループによる学習は学んだ内容の理解を深めるだけでなく、学習者が活気づき高い意欲を持って授業に取り組むと報告されている。多くの場合、授業に参加する学生は互いに知らないため、緊張していることが多い。ところがグループ活動をとおせば他の学生との壁が取り払われることによってリラックスした状態で授業に参加できる。そこから学習意欲が刺激されることが期待される。

さらに、スペイン語を実地に話すことのほかに文化に関する知識を得たいという希望にこたえるために、会話の素材としてスペイン語圏の生活や文化について調べるといった課題を与えた。この際にもグループ活動は各人の負担を軽減でき、多様な情報が集まりやすいという利点がある。

また30人以上のクラスにおいて一人ずつ発表すると相当の時間を要するが、その短縮のためにもグループで活動させることを選択した。

### 3. グループ活動を行なう授業の方針と展開

#### 3.1 グループ活動の対象クラス

第二外国語としてスペイン語を学習する初級学習者のクラスを対象とした(39名)。彼らは週に二回のスペイン語の授業に出席しており、ペアとなるもう一方のクラスでは共通教科書を用い、主として文法知識を学んでいる。第一学年のクラスであるため、ほとんどの学生の年齢が18歳から19歳の間に分布しており、外国語についてはこれまでに英語を6年間勉強してきている。

#### 3.2 目標

もう一方の文法知識を学ぶ授業では学習者は接続法現在形まで学習をすることになっているが、グループ活動を取り入れた授業では時間の関係上、直説法の時制のみを習得することを目指した。

#### 3.3 教材

授業は前半の文法習得と後半のグループ活動の二部に分けて行なったが、教科書は文法学習

## グループ活動を取り入れた初級スペイン語教育の試み（寸田）

には『生き生きスペイン語（福寫教隆）』を使用した。採用の理由は、取り上げている動詞、表現、語彙が、学習者が履修するもう一つのスペイン語クラスで使用されている教科書（『スペイン語パスポート（西川喬）』）と異なることである。『生き生きスペイン語』では、文法や訳読が中心となるが、会話部分に身近な日常生活の場面が設定されている。一方、グループ活動のためには、必要な単語や表現、情報を載せたプリントを配布した。

### 3.4 グループ分け

各グループの人数は、グループ内での発表をする形式のときには8名程度、クラス内での発表を行なうときには4名程度とした。他の学習者が考えたり調べてきたりした新しい単語や表現に触れる機会を全員に与えるために、そして活動への参加に消極的な者が出ないようにするために適当な人数と考えたからである。

またグループ分けをする際には、毎回同じ学習者が集まらないよう工夫した。というのも、同じグループでずっと活動を行なうと、グループ内で同じ学習者ばかりが意見を述べる一方、全体では私語が増える傾向があり、それを避けるためである。

実際には、名簿順にグループを作るオーソドックスな方法のほか、その場で誕生日やグループ活動で扱う好きなテーマを選択させるといった方法で、グループ分けを行なった。

### 3.5 グループ活動で使用する言語

スペイン語で会話を行なう活動以外は、互いの意思疎通に用いる言語は日本語とした。まったく触れたことのない言語を使って情報を交換することは、初級学習者にとっては困難で労力のかかることだと考えたからである。発話するには相手に伝える内容を事前に準備することが必要のため、まずはそれを日本語でしっかりと考え、その後用意した事柄をスペイン語にして話させた。単語の意味を教員に尋ねる時や、あらかじめ準備のできる発表を行なう時にはできるだけスペイン語を使用するよう指導した。

### 3.6 授業の展開

90分の授業のうち、45分は教科書を使った文法の指導をし、残りの45分で学習した文法事項を応用する活動を行なった。グループには毎回、学習者が興味を持つスペイン語諸国について知ることができる課題や学習者の身近に起こりうる場面を想定した課題を与えた。

これらの課題を基にしたグループ活動の形式としては2パターンを用意した。すなわちグループ内で発表を行なう形式とクラス内で発表を行なう形式である。

それぞれの形式がどのように実践されたかは、続く各項で詳細を解説する。

### 3.6.1 グループ内で発表を行なう形式

1回の授業で活動を終わらせるときや、クラス全体で情報を共有しなくてもよい場合に、グループ内での発表を行なうという形をとった。

活動テーマ—自己紹介（ser 動詞の活用）、スペイン語圏の国々の場所（動詞 estar）、自身の描写（形容詞）、朝からの行動を時系列で表す（再帰動詞）、絵の描写（直説法点過去形）

上記のテーマのうちから「自身の描写」を例として活動の手順を紹介する。

活動時間	学習者の活動	教員の活動
5分	説明を聞く。	ser, estar, tenerを使って自身の描写をするように指示をする。例を板書する。必要になりそうな色や体の部位の載ったプリントを配布。
15分	日本語でどのように自身を描写するか考え、その後 ser, estar, tener を使ってスペイン語で表記する。 (個人活動)	教室を巡回し、活動に困難を感じている学習者の手助けをする。学習者が書いたスペイン語に間違いがないかをチェックする。
20分	①スペイン語で記入した紙をグループ内で集める。 ②集めた紙をだれが書いたものかわからないようにし、1人1枚ずつ引いていく。 ③自身が引いた紙に書いてある描写をグループ内で発表する。 その際、発表者以外は ¿Cómo es? (どんな様子ですか) ¿Cuántos años tiene? (年齢はいくつですか?) など簡単なスペイン語を使って質問をする。 ④その人物がグループ内のだれを描写したものであるかを推測する。 (グループ活動)	全体に対し活動内容を説明。スペイン語を正しく使用できているか、活動を巡回し、チェック、指導する。
5分	教員の説明を聞き、書いたものを自身で添削する。 完成したスペイン語を教員に提出。	多く見られた間違いを板書してクラス全体で共有する。

全員が参加しなければグループ活動が成立しないため、どの学習者もスペイン語で表現する機会を必ず得ることになった。

しかしその表現はそれぞれが自身で考えたものであるため、指摘がない限り間違っただまの表現や文法を使い続けることになる。そのため学習者が書いたスペイン語の課題を最後に必ず教員が回収し、添削した。

### 3.6.2 クラス内で発表を行なう形式

クラス内での発表を行なう形式は、課されたテーマについて各々が調べた内容を共有したほ

グループ活動を取り入れた初級スペイン語教育の試み（寸田）

うがよい時に用いた。

活動テーマ—有名人の描写（形容詞）、スペイン語圏の国々について（比較級）

たとえば、「スペイン語圏の国々について」という課題に対して、グループ活動は次に示す手順で進められる。

	活動時間	学習者の活動	教員の活動
1 回 目	10分	自分の調べたい国がどれかを考え、グループに分かれる。	スペイン語圏の国について調べて発表することを説明。 比較的調べやすい国を7つ挙げる。
	30分	グループごとにその国について知っていること、教科書、携帯端末機器などから得られる情報から、可能な限り調べる。 できた所からスペイン語に訳す。	いくつかの文については比較級を使って表すことを指示。 難しい表現については、手伝う。 携帯端末については、この時間に限り許可する。
	5分	グループごとに各人の役割分担をする。	次回までにより詳細な情報を調べてくることを指示。
2 回 目	40分	①調べてきた情報を吟味。 ②3つは必ず比較級を用いた文であらわす。 ③発表用の原稿にスペイン語で記入。	教室を巡回し、学習者の質問に答えたり、学習者が書いた文の訂正を行ったりする。
	5分	発表時の役割分担をする。	原稿を預かり、次回までにクラスの人數分をコピーする。
3 回 目	5分	配られたプリントを確認する。	前回で上がった原稿を配布。発表の順番を決める。
	35分	教室の前に出て順番に発表を行なう。 自分のグループ以外の発表で、わからない表現や単語が出てきたときにはスペイン語で質問をする。	原稿の間違いを訂正する。 発表の終わった国について、写真などを用いて補足説明をする。
	5分	各グループの発表を聞いて、一番行ってみたと感じた国を考える。	発表を聞いてどの国が一番魅力を感じたのかをクラス全員に質問する。

スペイン語圏の国について取り上げたこの活動は複数回かけて行なった。それぞれの国の調査に時間が必要であったためである。最初は比較級を使うことだけを求めたが、2回目以降は前半の文法の授業で最上級の説明も行なったため、その知識を生かそうとしたグループもあった。

クラス発表をする場合には個人ではなくグループでスペイン語を考えるため、間違いを学習者同士で指摘し合うことができた。

クラス全体での発表は、調べてきた事柄を全員で共有するために有効であった。しかし、質疑応答のときには、同じ学生ばかりが質問をする傾向があったため、スペイン語の発話の機会を与えるという点ではあまり機能しなかった。

## 4. グループ活動を行なった成果と課題

### 4.1 グループ活動の成果

今回試みたグループ活動の成果として、クラスに連帯感が生まれたことがまず挙げられる。筆者は文法訳読方式のみの授業も行なっているが、そのクラスでは一部仲の良い学生のグループがあっても全体的なつながりは感じられない。しかし、グループ活動を取り入れたこのクラスについては、活動をとおして互いの人となりを知る機会があるためか、わからないことがあれば気兼ねなく周りに質問をしたり、互いに教え合ったりする光景が見られ、学生同士の距離が近くなって、活発な活動につながっているのがわかる。

今回は学習者の希望を汲み、会話の形式を取りながら文法事項定着を図るためにグループ活動を行なった。その結果、一つ成果が表れたとすれば、それは初習学習者がよく犯す間違いが減じたことである。たとえば形容詞について言えば、形容詞を名詞に後置することや、名詞と性・数一致させることを初習学習者は忘れがちであるが、活動を進めていくうちにこの間違いが表れる頻度が下がっていった。さらに活動で繰り返し使用した質問表現や単語、比較的初期から使用していた文法事項、たとえば直説法現在形を使えるようになった。特に使用頻度の高い *ser, estar, tener* といった動詞の活用については現在形に限らず、どの時制でも比較的早い段階で活用の誤りが減り、正しく用いられるようになった。

グループ活動によるもう一つの成果は、学習者が他の学習者のスペイン語運用能力を認識したことである。グループ活動に参加すれば、必ず他の学習者のスペイン語能力に触れる。そこで自らの力と照らし、それを自己認識の材料にして学習に生かそうとする学習者が見られた。

### 4.2 グループ活動を行なううえでの反省点

#### 4.2.1 学習者側の問題

宿題や予習をやってこない学習者がおり、こちらが思うようには活動が進まないことがあった。そのような場合には、全員に配るプリント原稿のレイアウトを考えさせたり、自分たちがスペイン語で書いた文のチェックをさせたりと何らかの役割を与えて活動に参加させるようにした。

また、グループでの活動に積極的でない学習者もいた。実践的な活動が好きな学習者もいれば、そうでない学習者がいるのは当然であり、後者への対応が難しいところである。そうした学生には積極的に声をかけ、グループ活動から孤立してしまわないように注意した。

これらの問題は教員が十分に対応し得るものである。教員はしっかりと学習者の行動を把握し指導を行なえばよい。

文法事項について言えば、何度繰り返しても正確に運用できない項目もあった。たとえば、目的格人称代名詞、動詞の直説法点過去形の活用の一部（不規則形）などである。これらは記



憶する量の多さや日本語で説明されても理解しづらい学習項目であるので、授業中の練習問題や実践だけでは練習量が不足であるように感じられた。

#### 4.2.3 教員側の問題

指導する側の問題、教員の活動中の役割にも注意しなければならない。筆者は学習者の自発的な学習を促すために、グループ活動中にはできる限り、学習者から質問されたり、間違っただけの表現をしているのに気付いたりした時の他はこちらから指示しないよう心がけた。日本語をスペイン語に訳す時に既習事項を使ってどう表現できるのかを考えさせたかったので、文章ができ上がって学習者が添削をして欲しいと申し出るまでこちらからは積極的に間違いを指摘しなかった。間違いを訂正する際にひとつづつ気を付けた点がある。それはその誤りの修正をクラス全体に周知するという点である。個々のグループからクラス全体に発表させるときは問題ないが、グループ内で完結する活動のときには訂正の仕方に注意が必要である。活動中は教員が各グループを見回り、学習者の表現の文法的な誤りに気が付けば、質問を誘導した後、その場で訂正する。しかし、そのグループの構成員だけが間違いに気付くのでは効果が薄い。どのような間違いが起り得るのかを確認させるため、板書をしてその間違いをクラスの全員に伝えることが必要である。

### 5. まとめ

今回グループ活動を取り入れた授業を行なってみて、文法シラバスの授業に比べて学習できる項目が少なくなるという問題や活動内の指導のありかたについて改善点すべき点があるものの、文法項目の習得にはある程度効果があるとの感触を得た。またグループ活動は教室を活かすことに貢献する傍ら、学習者自身が知りたいと望むことを学習する環境を整えることで、スペイン語圏の国々の文化やスペイン語それ自体への興味を彼らのうちに膨らませ、スペイン語を学習する積極性を付与するものであると実感した。こうしたことから、グループ活動を教室での授業に取り入れる意義は大いにあると思われる。

さらにこのグループ活動の実践を通じて外国語学習の目的についても考えさせられた。学習者の目的や関心を知ることは授業の方向性や方法を定める上で不可欠である。合わせて、我々教員は大学における第二外国語学習の意義を考える必要がある。会話ができればいいのか、情報を手に入れるためのツールとしての外国語が必要なのか、外国語をとおして他の国や文化について知って欲しいのかを教員自身が再認識し、学習者の目的と大学教育の理念とを両立させるように授業を工夫する必要がある。今回はその試みの端緒としてグループ活動を取り入れてみたが、学習者の目的に寄ってしまったようにも思う。今後もこの2つの目的の両立もしくは融合を目標に授業の改善に取り組んでいきたい。

註

1) 内発的動機 (intrinsic motivation)

motivation that deals with "behavior performed for its own sake in order to experience pleasure and satisfaction" (Dörnyei, 2001, p27)

Vallerand は内発的動機を細分化し、内発的動機には知識、達成感、刺激の3つの側面があるとしている。(八島、2004、p.53)

参考文献

- Dörnyei, Z. (2001) *Teaching and Researching Motivation*. Longman. Vallerand, R. J. (1997) *Toward a hierarchical model of intrinsic and extrinsic motivation*. *Advances in Experimental Social Psychology*
- スペイン語教材研究会 (2011) 『総合スペイン語コース初級 Entre amigos』朝日出版社
- スペイン語教材研究会 (2011) 『総合スペイン語コース中級 Entre amigos 2』朝日出版社
- 高橋寿夫 (2008) 「授業の活性化に向けて—グループによる学生参加型授業の実践的考察」『関西大学外国語教育フォーラム』第7号関西大学外国語教育研究機構
- 中島さやか、落合佐枝、菅原昭江、大森洋子 (2011) 「日本の大学における初級スペイン語教育のための教科書評価の枠組み(試案)と『Entre amigos』のケース：コミュニケーション能力獲得を目指した授業で」『カルチュラル』明治学院大学教養研究センター
- 西川喬 (2009) 『スペイン語パスポート』弘学社
- 福嶋教隆 (2005) 『生き活きスペイン語』朝日出版
- 八島智子 (2004) 『外国語コミュニケーションの情意と動機』関西大学出版部